

静岡県教育長賞

おさんぽ元気パトロール

浜松市立伊佐見小学校 三年

山本 彩衣里



「小さな親切。」について考えた時、人から「ありがとう」と言われたことを思い出しました。

わたしのうちに十四才のシェルティーがいます。名前はコトです。コトは歩くのがにがてです。うしろ足が生まれつき弱く、さいきんは年のせいで自分ひとりでは立ち上がれないくらい弱くなってしまいました。

元気な犬をつれている人を見ると、わたしはなんだか悲しい気持ちになりました。

公園につれていってもコトはいっしょに走ってくれません。すぐにすわってしまいます。

しかし、そんなコトをつれていると、近所のおばあさんやおじいさんが話かけてきます。

「わんちゃんいくつ。」

「十四さいです。」

「えらいねえ。がんばってるねえ。」

近所のおばあさんたちはわたしではなくコトにむかってえら

い、えらいねとほめるのです。ただ歩いているだけなのに、あつちでもこっちでも。

「うちにも昔犬がいたのよ。さいごはねたきりになっちゃった。まだ歩いてえらいね。」

そうやってコトをなでていく人が何人もいます。

わたしに話しているのか、コトに話しているのか、コトを通して昔のあい犬に話しかけているのか分かりません。そんな時はふしぎな時間がながれます。いろんな人に、むねのおくにしらまつである大切な思い出があつて、いっしゅんだけ見せてもらったような、ふしぎな時間です。

「ありがとね。」

ただ話を聞いているだけなのにありがとうといわれます。

コトは、もうわたしと遊ぶことはできません。立ち上がるのもやつとなので、番犬にもなりません。でも、歩いているだけで、お年よりの心をいやして、元気づけているのだと思います。だからわたしはコトとのさんぽを「おさんぽ元気パトロール」と名付けました。

コトがだれかの心をいやしたように、だれでも生きているだけで、だれかのいやしになるのではないのでしょうか。

あつち中、はたらいっている人を見れば、わたしも元気が出ます。つえをつきながらさんぽしているお年よりのすがたも、が

んばっていてすてきです。
わたしはこれからも、コトといっしょにおさんぽ元気パトロールをつづけます。

